

地震の恐ろしさ忘れない

一関市
本寺小 防災の重要性学ぶ

一関市蔵美町の本寺小の飛行を見学。飛び上がった佐々木竜蔵校長、児童23人は27日、防災学習の一環で、2008年6月に発生した岩手・宮城内陸地震の教訓を学んだ。災害時の被害調査などに活用される小型無人機ドローンも見学。地震の恐ろしさや災害への備えの重要性を再認識した。

全校児童が参加。同市と同日地震で落下した祭時大橋の復旧の設計を担った復建技術コンサルタント（仙台市）の盛岡支店社員らが当時の被害状況や自助や共助の重要性を説明した。児童は昨年ドローンで撮影された旧祭時大橋の映像などを見て関心を高めた。

校庭では実際にドローン

「ドローンは初めて見た。とても高くまで飛び上がりすこいと思った」と興味津々。小岩紀香さん（6年）は「内陸地震の被災地なので、忘れないことの大切さを感じた。災害が起きたときには家族6人で助け合いたい」と誓った。

同校は毎年、地震が発生した6月14日に合わせ、旧祭時大橋が見える祭時被災地展望の丘などの清掃活動を継続しており、防災の重要性を学んでいる。本年度は18年度に統合する蔵美小の5年生と一緒に行う予定。



小型無人機ドローンが飛び上がり、歓声を上げる本寺小の児童